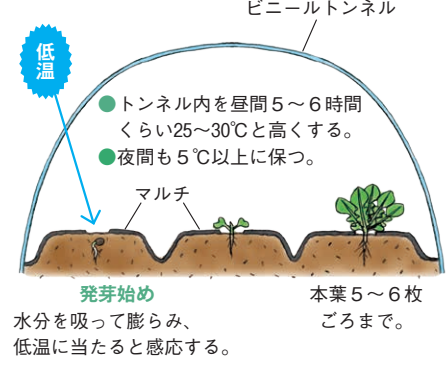




ダイコン カブ ニンジン

春まきで根菜を育てよう！

春まき栽培はトンネルやマルチを使い、生育初期の昼間は温度を高め！
(ダイコンの例)



1. 花芽分化・抽苔をいかにして防止するか
春まき栽培の成否は、いかにして花芽分化を遅らせるかにかかっています。これらの野菜は、ある一定の低温に遭遇すると花芽が分化します。これを春化作用といま

春まき栽培を成功させるには

ダイコン、カブ、ニンジンには夏の終わりから秋の初めにタネをまき11月から冬に収穫しますが、品種改良が進み、冬の終わりから春の初めにかけてタネをまくこともできるようになりました。晩抽性の品種と保温資材をうまく組み合わせれば、品質のよいものが4〜6月に収穫できます。ぜひ挑戦してみてください。



橋本 忠幸
香川大学農学部園芸学科卒業後、岡山県倉敷農業改良普及所を振り出しに、野菜の栽培技術指導、生産振興などに従事。現在、岡山西農業協同組合で野菜を中心に営農指導を担当。

(2) 保温資材の活用
保温資材を積極的に活用して生育を進め、花芽分化を遅らせましょう。特に、ビニールフィルムを使ったトンネル栽培では、タネまきを3週間から1カ月程度早められます。また、マルチや不織布なども使い、これらと組み合わせることで約2カ月早くタネまきすることもできます。

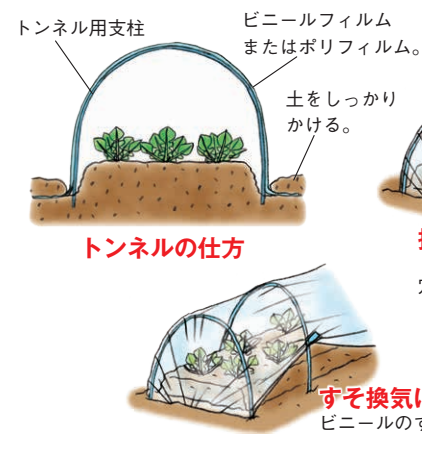
これらの野菜の生育温度はおおむね10〜25℃です。春に露地で栽培する場合、タネまきは昔からソメイヨシノが開花するころがよいといわれています。しかしこの時期の平均気温は10℃前後で発芽適温に達しておらず、発芽までに日数がかかります。最低温度が5℃を割ると花芽分化・抽苔が早まり、根部の肥大が悪くなってしまう。花芽分化の温度は品種により異なります。低温でも花芽分化が遅く、抽苔しにくい晩抽性品種を選びましょう。

(1) タネまきの適期を守ると共に 晩抽性品種を活用する
また、花芽分化にはダイコン、カブなどタネが吸水して発芽活動を始めると、いつでも低温に感応する種子低温感応型と、ニンジンなどある一定の大きさになると低温に感応する緑植物低温感応型があります。
その後の高温・長日で抽苔（トウ立ち）し開花します。花芽分化は夜間の低温が中心となり誘起されますが、日中25℃以上の高温で花芽の誘起が打ち消されます。これを脱春化作用といいます。
また、花芽分化にはダイコン、カブなどタネが吸水して発芽活動を始めると、いつでも低温に感応する種子低温感応型と、ニンジンなどある一定の大きさになると低温に感応する緑植物低温感応型があります。

タネまきの前進可能期間の目安
(ソメイヨシノの開花日を基準として)

マルチのみ	ビニールトンネル	ビニールトンネルとマルチ併用
約1週間	約3週間〜1カ月	約2カ月

ビニールトンネルによる保温と換気法

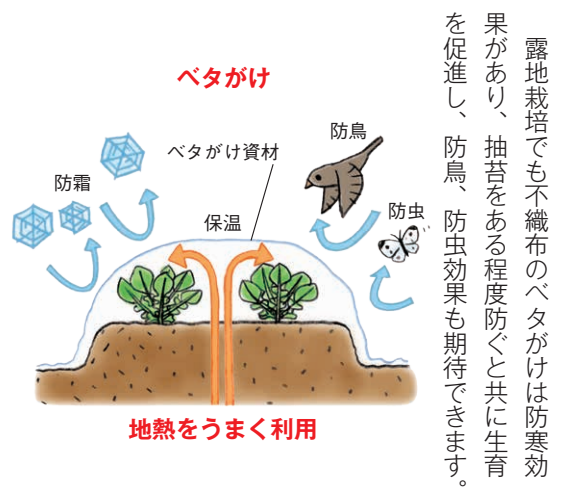


被覆資材はマイカ線などでしっかり固定する。

換気孔による高温回避
トンネルの上部またはサイドに穴をあける。
(注) 夜間の保温が劣る。

すそ換気による高温回避
ビニールのすそをたくし上げて換気。

(3) トンネル内の温度管理
寒い時期に温度を確保し、生育を進めるためにビニールフィルムで覆いをする、2月下旬ごろからの晴天の日には想像以上

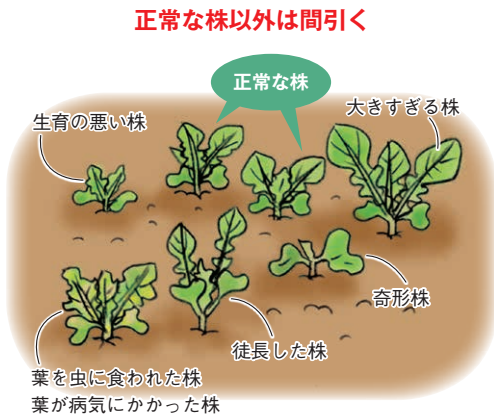


露地栽培でも不織布のベタがけは防寒効果が有り、抽苔をある程度防ぐと共に生育を促進し、防鳥、防虫効果も期待できます。

に温度が上昇し、障害を受けることがあります。温度調整をするために日中にトンネルのすそを上げて換気をしますが、毎日朝夕に換気作業を行うのは大変です。そこでビニールフィルムに1cm程度の穴を天井部から少し下にあげ、暖かい空気を出して温度を調整する方法があります。外気温が高くなるにつれて穴を大きくしたり、数を多くしますが、この方法の欠点は1回しかビニールフィルムを使えないことです。

2. 的確な間引き

1カ所に数粒タネをまく場合や条まきする場合は、どうしても多くのタネをまくようになりがちです。すると発芽がばらつき、徒長しやすくなります。そこで発芽後、1本立ちするまで数回に分けて間引きしましょう。1回目は双葉が開いた時に、葉が重ならないように密生部を間引きます。2回目以降は①葉が奇形したもの、②生育の遅れているもの、③大きすぎるもの、④病気にかかっているものや虫により被害されているものを中心に間引き、生育を揃えます。



3. 適地での栽培と土づくり

これらの野菜は根が肥大した部分を利用するため、耕土が深く排水性・保水性がよく肥沃な土壌が適します。地下水位が高く過湿になりやすい圃場では根腐れを起こし、またタネまき直前に未熟堆肥や元肥を与えるると岐根の原因になるので注意しましょう。そのため堆肥はできるだけ早く施用し、深耕をして土となじませておきます。

栽培カレンダー (春まきダイコン)

月	3	4	5	6	7	8	9
冷涼地		●	○	■	■	■	
中間地		●	○	■	■	■	
暖地		●	○	■	■	■	

●タネまき ○トンネル 一生育 ■収穫 ※品種によって栽培適期は異なります。

1. 圃場の準備

堆肥は前作収穫直後に施用し、数回深耕します。タネまき2週間前までに石灰質肥料を1㎡当たり100g、有機質入り化成肥料(チッソリン酸カリ10-10-10)150g施用し、よく耕うんします。畝立て後、十分水やりした後、または雨の後に生育促進と雑草防止のため、黒マルチをします。

2. タネまき時期

タネまきの時期により異なりますが、晩抽性の品種を選びましょう。おすすめ品種は、トツランナー、三太郎です。

1月下旬～2月上旬まきではビニールフィルムで、2月中旬以降はポリフィルムで被覆するトンネル栽培とします。畝は幅約120cmの高畝とし、2条で株間約30cmの千鳥まきとします。タネは1カ所3～4粒とし、覆土をして水をやりまします。

露地栽培では3月下旬ごろにタネまきし、抽苔防止と生育促進のためにタネまき直後直ちに不織布をベタかけします。不織布を除去するのは間引きが終了し、1本立ちしたところに行いましょう。

3. トンネル栽培における温度管理

①タネまき後から5葉期ごろまでは、トンネル内温度30℃程度を目標にします。
②5～10葉期ごろまでは、トンネル内温度25～30℃を目標にします。

③10葉期以降はトンネル内温度20℃を目標とし、茎葉の繁茂を抑えて根の肥大を促進します。高い温度で管理すると葉ばかりがで、根の肥大が悪くなります。
④3月下旬ごろから外気温も上昇してくるので、徐々に外気に慣らしながら4月中

旬ごろをめどに、トンネルを除去します。

4. 間引き

1回目は双葉展開時に正ハート形のを残します。2回目は本葉が2～3枚展開したところに2本にし、3回目は5～6枚展開した時に生育のよいものを残して1本立ちにします。間引き後は株の倒伏や胚軸の曲がり



右は2回目 (本葉2～3枚ごろ)
左は3回目 (本葉5～6枚ごろ)

5. 追肥・水やり

生育状況を見ながら1本立ち後、必要ならば追肥を行います。マルチをしているため水やりしにくいですが、ダイコンは水分要求量が高いので、定期的な水をやるのが望ましいです。生育初期は午前中に少なめに、生育が進むにつれ水の量を増やします。

6. 病虫害防除

4月後半以降、気温が上昇するとアブラムシ類やアオムシが発生するので、適宜殺虫剤で防除しましょう。4～5月に収穫するトンネル栽培では病虫害の発生が少なく、無農薬栽培も可能です。

7. 収穫

タネまきの時期にもよりますが、タネまき後65～75日で収穫期に入ります。気温が上昇する時期でもあり、収穫が遅れると品種によっては抽苔する株が出てくるので注意しましょう。

- 〈春まき栽培のポイント〉
- 1 播種時期に合った品種選定と、保温資材の活用を努める。
 - 2 トンネル栽培では適正な温度管理に努める。
 - 3 適期収穫に努める。